安積開拓官舎（旧立岩一郎邸）と久米正雄（くめまさお）

立岩一郎と安積開拓

福島県は、明治12年（1879）2月に開拓事務を担っていた勧業課出張所を廃止し、業務を安積郡役所が引き継いだ。細かな補佐をしていた出張所に対し、入植者に干渉しない郡役所と入植者の間で葛藤が生じていた。一郎は同年6月12日付けで福島県二等属に任命され、勧業課開拓掛として桑野村（安積殖民所）へ派遣された。明治6年（1873）から本格的に始まった開墾事業が年を経て、開成社の小作人問題や久留米開墾社の内紛など様々な問題が生じていた。また、安積疏水開さく事業について県側の担当者を決める必要があった。福島県は、明治12年11月に勧業課開拓科出張所を開成館に設置し、一郎を開拓科出張所長に任命した。一郎は、問題解決のため奔走している。

明治13年（1880）6月18日に郡山農学校が開校した。一郎は、開拓科出張所長兼務で、初代校長となった。校舎は、郡山学校（現在の金透記念館）である。郡山農学校には、一郎の養継嗣である震作が入学している。

明治9年（1876）に続き、明治14年（1881）の明治天皇巡幸の際にも、一郎は「御巡幸事務掛」を務めた。明治天皇巡幸の最中、8月に中條政恒が急遽太政官少書記官へ転任となった。一郎は同年11月4日に県へ辞表を提出し、県官を辞任した。直後に大槻原開墾から県政、山吉県令の批判などを綴った『分草実録』を執筆している。

県官を辞任した一郎は、移住士族全体を対象とした「東北開墾社」の設立や、福島県庁を安積郡へ移転する県庁移転運動などを行った。東北開墾社は資金難で破綻し、県庁移転運動は一旦県会で可決したが、その後内務省により却下されている。

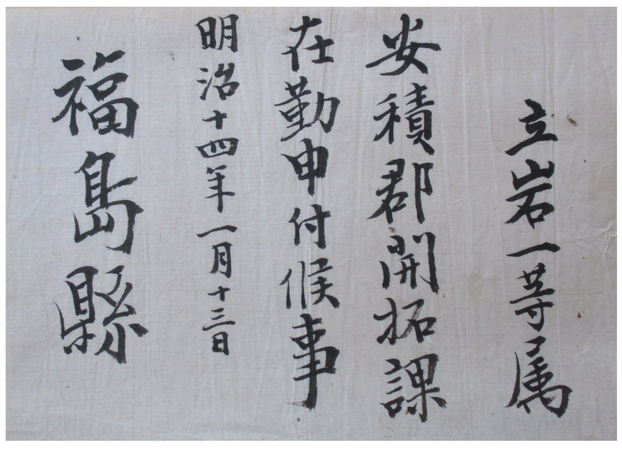
その後、一郎は青森県に勤務し、退職後は桑野村の自宅（現在の安積開拓官舎）へ戻り、桑野村村長などを勤めて晩年を過ごした。

明治33年（1900）4月14日に中條政恒が歿し、翌年2月13日に一郎も亡くなった。中條、一郎共に「開拓者墓地」（郡山市台新）に眠る。

明治十二年二月十二日、勧業課出張所ヲ廃シ、安積郡役所ヘ分任シ、従来専門負担ノ官吏ヲ除キ新任ノ郡吏ニ委ねタリ、夫レ出張所ノ精神ヲ繹ヌル ニ、本地ハ未タ其堵ニ安ンセサルノ新」民ナルカ為ニ、稲苗買入、水引水番ニ至ル迄、朝夕奔走艱苦ヲ同フセシニ、郡吏ニ於テハ干渉ハ官吏ノ為スヲ所ニ非スト為シ、氷炭器ヲ殊ニスルカ如ク処分ヲ施シ、郡衙ト新民ノ間ニ葛藤ヲ生シ、如何共スヘキナキニ至リ、纔カ二四ケ月ナラシテ、同年六月十二日一郎ヲ属ニ転任、開拓掛トシテ出張セシメ、開拓ノ事万般一郎ニ協議ノ上決行スヘキ旨、郡長ヘ県達アリ、

開拓掛・立岩一郎

『分草実録』立岩家文書（郡山市歴史資料館蔵）より抜粋
読点「、」を加えた。



辞令（立岩一郎　安積郡開拓課在勤申付候事）

立岩家文書　郡山市歴史資料館蔵

今茲ニ檄ヲ伝テ諸君ト共ニ国家ノ為メ、富強ヲ図ント欲スル所以ノ者ハ他ナシ、遺利ヲ拾フニ在リ、遺利ヲ拾フトハ何ソ、曰ク荊棘ヲ披キ荒蕪ヲ拓キ、而シテ物産ヲ隆興スルニ在リ、諸君夙ク茲ニ観ルアリ、奮然遠ク山川ヲ越ヘ風スル馬牛モ相及ハサルノ地ニ来リ、親ラ耒耜ヲ荷ヒ身ヲ糞土ニ委ね屈撓ノ色ナキ者ハ他ナシ、富強ヲ図ンカ為メナリ、何ソ其レ悲壮ナルヤ、嗚呼我党ノ諸君能ク之ヲ熟慮セヨ、四海皆兄弟ナリ、吉凶禍福相供ニスル ハ論ヲ待タサルナリ、然ルヲ況ヤ同ク大志ヲ懐ク開墾」諸君ニ於テヲヤ、素ヨリ甲社ノ緩急乙社以テ胡越視スルナキハ万々ナリ、而シテ我県ハ十三ノ旧藩、二ノ旧旗下ヲシテ領セシム、今之ヲ併テ一県トナシタル組織ナレハ、八十余万ノ兄弟各其施治者ヲ異ニスルヲ以テ、各郡各郷其趣キヲ異ニスルモ、周囲僅ニ百八十四里一望之レヲ極ムル ニ足ル狭小ノ地方ナレハ、仮令慣行人情ノ相異ナルモ、敢テ差ナキヲ知ル、諸君ハ数百里ノ雲外ニ在リテ、各其大藩ノ空気ニ棲息セシ文武ノ士族ナレハ、慣行人情我県ノ混同民族ニ対シテ大ニ異ナル所アルカ如シ、請フ諸君猶且各事ニ猛省シ移住ノ始メニ於テ能ク善良ノ施設アラハ例トナリ、法トナリ、一郷挙テ善良ノ邑トナラン、富強ノ基礎於是乎観ル矣、苟モ其旧套ヲ脱セス、或ハ姑息抑圧ノ事アリテ、以テ一タヒ人和ヲ失セハ内外圧礫ヲ生シ、物其宜キヲ失ヒ、事其害ヲ醸シテ一戸一身尚ホ容ルヽニ由ナク、豈富強ヲ図ルニ暇アランヤ、故ニ我党ノ諸君、隔月第二ノ日曜日各其行厨ヲ携ヘ郡山農業学校ニ参会シ、説クニ、耕耘播種ノ便否ヲ以テシ、結フニ緩急相救フノ厚誼ヲ以」テシ、断テ浮華ヲ用ヒス必ス慎実ヲ尊ヒ、事業進捗ノ道ヲ開キ、新旧人民ノ交義ニ戻ラス、政府優渥ノ恩待ニ報スヘキノ事ヲ、懇親話頭ニ尽サント欲ス、嗚呼天ノ時ハ地ノ利ニ如カス、地ノ利ハ人ノ和ニ如カス、伏テ願クハ、同感ノ諸君幸ニ賛成以テ収親会ヲ開カンコトヲ果シテ、開会ノ期アラハ開成社・桑野村・双松・棚倉等ノ開墾社ヘモ檄ヲ飛シテ、会同セシメント欲ス、請フ、諸君之ヲ了セヨ、

明治十四年四月六日　　立岩　一郎（印）

移住士族の和親協力を訴えた立岩一郎檄文

立岩家文書　郡山市歴史資料館蔵
読点「、」中点「・」を加えた。

立岩家と久米正雄

立岩一郎の父である千秋（せんしゅう）（秀年。明治に入り雅号を本名とした）は、文人、歌人であった。福島県の小学校教則講習所（福島師範学校の前身）で訓導（教諭）を務めた久米由太郎は、千秋を尊敬し交誼を深めた。その縁で一郎の長女であるユキ（幸子）と結婚した。

その後久米家は長野県に移住し、正雄は長野で誕生した。由太郎が小県郡上田尋常小学校の校長を勤めていた時、明治天皇巡幸時に行在所となった校舎が、火事により焼失した。その責任をとり、由太郎は自害する。正雄は、このことをモデルに『父の死』を執筆している。

父の死により、久米家は母方の実家・立岩家のある桑野村へ移住した。久米家は開成館の一角を借り、正雄はそこで成長する。開成館を借りるまでの一時、一家は立岩家、現在の安積開拓官舎（旧立岩一郎邸）へ身を寄せている。

久米 由太郎（よしたろう）

久米 ユキ

久米 正雄